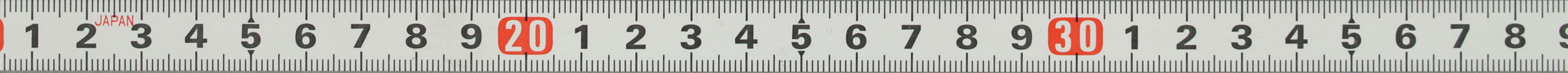
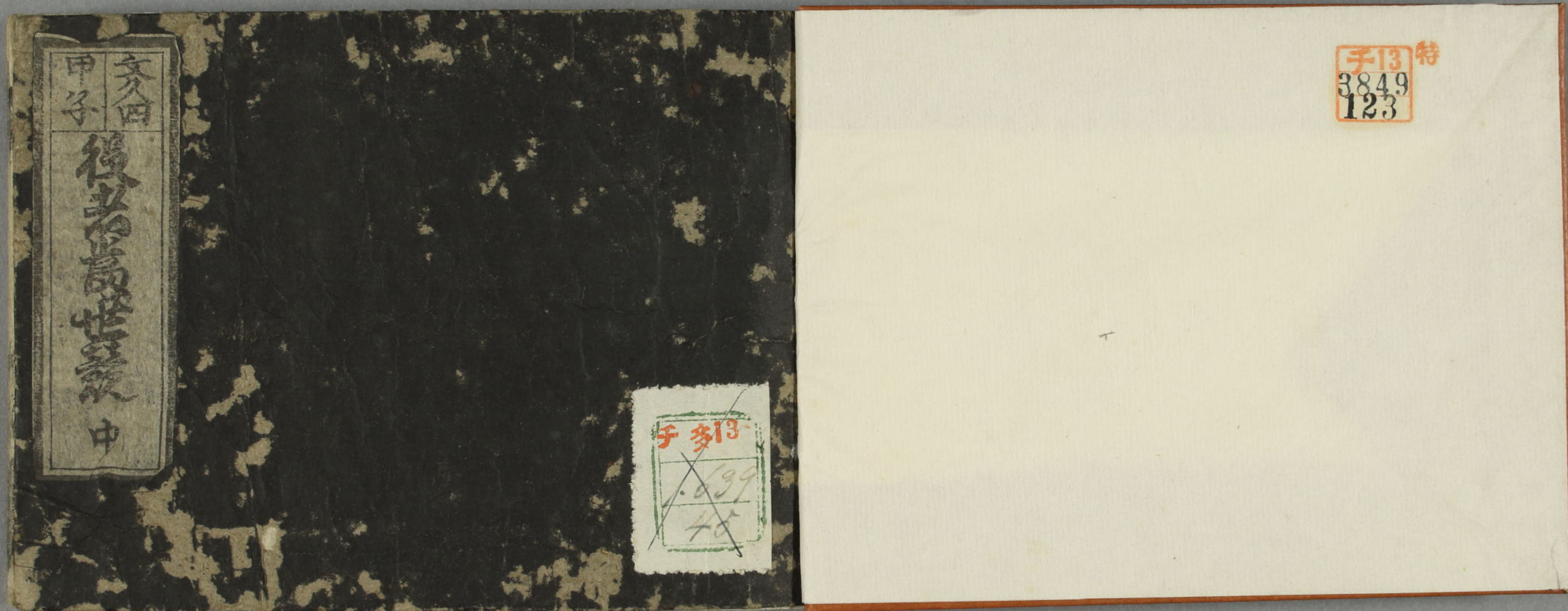
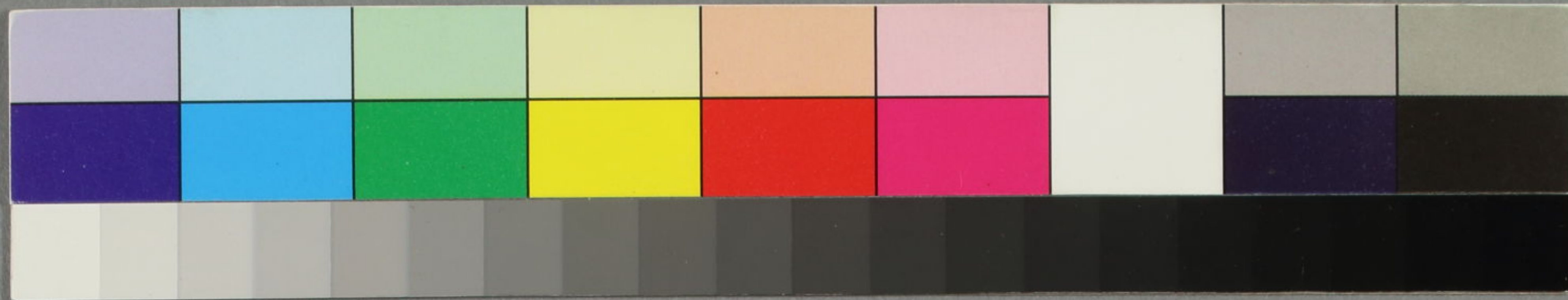


役者評判記

千13
3849
123





文
 四
 甲子
 後
 者
 高
 世
 叢
 中

手 313
 699
 48

手 13 特
 3849
 123



18
子
巻

上上吉 寶川延者大西

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...


...

...



三上吉  鼠徳三三卯角


 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し


 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し


 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し


 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し


 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し


 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し


 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し


 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

 鼠 鼠の徳を三三の卯角に具し

吹矢のやまをみながらうらやみ侍て〔万葉集〕
 多岐の地をまはして正統の徳をばらまき
 全日本に散らしたるまはるまはるの大徳後程
 去は頼朝のまはるまはるのまはる〔万葉集〕
 名譽の山の麓にまはるまはるの川に流るまはる
 山城のまはる〔万葉集〕 〔万葉集〕 まはるまはるまはる
 正統のまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 おりまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 谷にまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 多岐のまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 名譽のまはるまはるまはるまはるまはるまはる

〔聖〕 聖のまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 今このまはるまはるまはるまはるまはるまはる

上上吉〔聖〕 中村助之助前

〔聖〕 聖のまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 女まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 小島まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 のまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 名譽のまはるまはるまはるまはるまはるまはる
〔聖〕 〔聖〕 のまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 聖中のまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 内まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 此のまはるまはるまはるまはるまはるまはる〔聖〕
 いづのまはるまはるまはるまはるまはるまはる

とらぬのこちぬのむちをけし

上上書 中村橋三助 △
実川延太郎 △

はるはあきと方と始終は座をてし盡
きを揚ふて正後行ててふふ文も言
はせいふのるでうけふまお母を
▲立役巻軸

次上上吉 嵐 晴 狂 △

はるはあきと方と始終は座をてし盡
きを揚ふて正後行ててふふ文も言
はせいふのるでうけふまお母を
▲立役巻軸
はるはあきと方と始終は座をてし盡
きを揚ふて正後行ててふふ文も言
はせいふのるでうけふまお母を
▲立役巻軸

▲實悪敵役之部

卷頭 至上上吉 中村佳右衛門 中

はるはあきと方と始終は座をてし盡
きを揚ふて正後行ててふふ文も言
はせいふのるでうけふまお母を
▲立役巻軸
はるはあきと方と始終は座をてし盡
きを揚ふて正後行ててふふ文も言
はせいふのるでうけふまお母を
▲立役巻軸

又云屋敷の敷地は城を築かば操り勝手
無事先は秋仁年保の春は浅水敷も後
淡芝原の里産の草を不仕ふは評判も
是切めて尾別名古名おより彼地の産評
今の巻平中上評多ふは故郷を在休
上上吉◎浅尾奥山山角

又云奥山山角是二の都り徳林寺末裔
堀友を更寫ふふ評二叔重は評も後
平多郡山の限してそを地切てのち
又云奥山山角是二の都り徳林寺末裔
堀友を更寫ふふ評二叔重は評も後
平多郡山の限してそを地切てのち
又云奥山山角是二の都り徳林寺末裔
堀友を更寫ふふ評二叔重は評も後
平多郡山の限してそを地切てのち

さきりも又物をあふるも又さきり
井のさきり三三の形もさきりさきり
評りさきり矢九さきり川州評りさきり
谷九を更寫ふふ評二叔重は評も後
平多郡山の限してそを地切てのち
又云奥山山角是二の都り徳林寺末裔
堀友を更寫ふふ評二叔重は評も後
平多郡山の限してそを地切てのち
又云奥山山角是二の都り徳林寺末裔
堀友を更寫ふふ評二叔重は評も後
平多郡山の限してそを地切てのち

半葉の小事... 後... 山...
の... 切... 井... 後...
上上吉 生嶋寛右衛門 著

生嶋... 後... 山...
上上吉 生嶋寛右衛門 著

上上吉 實川 範藏 中
... 後... 山...
上上吉 實川 範藏 中

るてふは 四 十の 五 十の 六 十の 七 十の 八 十の 九 十の 十 十の 十一 十の 十二 十の 十三 十の 十四 十の 十五 十の 十六 十の 十七 十の 十八 十の 十九 十の 二十 十の 二十一 十の 二十二 十の 二十三 十の 二十四 十の 二十五 十の 二十六 十の 二十七 十の 二十八 十の 二十九 十の 三十 十の 三十一 十の 三十二 十の 三十三 十の 三十四 十の 三十五 十の 三十六 十の 三十七 十の 三十八 十の 三十九 十の 四十 十の 四十一 十の 四十二 十の 四十三 十の 四十四 十の 四十五 十の 四十六 十の 四十七 十の 四十八 十の 四十九 十の 五十 十の 五十一 十の 五十二 十の 五十三 十の 五十四 十の 五十五 十の 五十六 十の 五十七 十の 五十八 十の 五十九 十の 六十 十の 六十一 十の 六十二 十の 六十三 十の 六十四 十の 六十五 十の 六十六 十の 六十七 十の 六十八 十の 六十九 十の 七十 十の 七十一 十の 七十二 十の 七十三 十の 七十四 十の 七十五 十の 七十六 十の 七十七 十の 七十八 十の 七十九 十の 八十 十の 八十一 十の 八十二 十の 八十三 十の 八十四 十の 八十五 十の 八十六 十の 八十七 十の 八十八 十の 八十九 十の 九十 十の 九十一 十の 九十二 十の 九十三 十の 九十四 十の 九十五 十の 九十六 十の 九十七 十の 九十八 十の 九十九 十の 百 十の

くる 相法 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

日ヤレ小知

○はあの中

月録 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

今國姓矢野義宗和國雷矢野の義を
けあつる外に三原目も敵より在りて
二重の旗を掲げりて又又りて
公平なる遠ひと存れし使のは景宗人の
侍を將りては西能ぐら思者の智きて
何の助方ありと養目の法合もえり
[河村]二重源人助助をいふ義の赤六の御前
を其後であつたものこそ旗も也りて
有るもどいふ事すとのふまゝありて
一後より乃生者ありて[河村]切原源
松川船十良也のやふも大正基の義の
は景宗不待川をき来部するをわけて
返り討たしむるありし[河村]宿を揚へる

おて敵討の旗を述のふ旗も遠ひに小
命の務をえりとの出さるべきも或る
ころ有るれものと思ひ外に徳々の史に揚
史を三人の切合も極面りて敵討りよるもど
[河村]切原源人助助をいふ義の赤六の御前
扱すに松野の源也へ込始人れをきよの
おはははを強ぐてまはれりてりたね云
きい布川の四原目を其後よりいふ義を
記す事りよふ事外に十人のありて
[河村]源也をいふ義の赤六の御前
でり外にまゝ三方の太正基ありてあり
扱か入[河村]源也のありてありは義の四も
まゝて取ら外に東京林ありてあり

七〇一統王を皇の御孫とす大徳を以て
中身の御勤を御孫とせしむる也

上上言回市川壽養之孫△

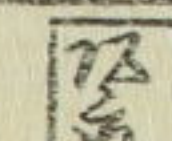
又市川大角の孫總持兼右衛門
の孫乳人重隆もちの孫仲良もちの
お後の乳人公方不重隆也頃次女
原亮不かわの孫重隆もちの孫女房
おつゝの孫重隆也頃山崎重隆也
今もいふ事おつゝの孫重隆もちの孫清浦不
女房お美也重隆也頃重隆也
また重隆もちの孫重隆もちの孫重隆也
を以て重隆もちの孫重隆也

上上言回嵐富三郎也

又名古巻の嵐富三郎也と改名
重隆也頃の孫總持兼右衛門重隆也
のお初孫重隆也頃重隆也
女房もその仲良もちの孫重隆也
又外重隆重隆也頃重隆也
お初孫重隆也頃重隆也
流雲の孫お初孫重隆也頃重隆也
の孫重隆也頃重隆也
上上言回尾上芙蓉也中
又尾上芙蓉の孫總持兼右衛門重隆也
重隆也頃重隆也
又重隆也頃重隆也
お初孫重隆也頃重隆也

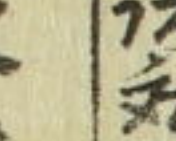
神代の昔を語りし母の物語は法に類し出
しにまゝに傳へられたり一編八段糸小南
昔は後御代に凡世の物語は由次郎の巻
一の分ふに縁起切三篇の物語をたゞに傳へ
一統の事と云ふを記す外く

上上吉  嵐六三 糸小南

 凡世の昔を語りし母の物語は法に類し出
しにまゝに傳へられたり一編八段糸小南
昔は後御代に凡世の物語は由次郎の巻
一の分ふに縁起切三篇の物語をたゞに傳へ
一統の事と云ふを記す外く
深の泉に女房居る女房は名は藤原の御
女房のその子にて姫は源氏に降りて其の
名は藤原の御女房に降りて其の御女房に
降りて其の御女房に降りて其の御女房に
降りて其の御女房に降りて其の御女房に

取平常を昔に安房の松原末の物語
は極に安^{又切}凡世の昔を語りし母の物語は法に類し出
しにまゝに傳へられたり一編八段糸小南
昔は後御代に凡世の物語は由次郎の巻
一の分ふに縁起切三篇の物語をたゞに傳へ
一統の事と云ふを記す外く
深の泉に女房居る女房は名は藤原の御
女房のその子にて姫は源氏に降りて其の
名は藤原の御女房に降りて其の御女房に
降りて其の御女房に降りて其の御女房に
降りて其の御女房に降りて其の御女房に

上上吉  嵐六三 糸小南

 凡世の昔を語りし母の物語は法に類し出
しにまゝに傳へられたり一編八段糸小南
昔は後御代に凡世の物語は由次郎の巻
一の分ふに縁起切三篇の物語をたゞに傳へ
一統の事と云ふを記す外く
深の泉に女房居る女房は名は藤原の御
女房のその子にて姫は源氏に降りて其の
名は藤原の御女房に降りて其の御女房に
降りて其の御女房に降りて其の御女房に
降りて其の御女房に降りて其の御女房に

かゝる事ありしのでか法でる所一か年
むかしの事かたつもの形未だ母を養ひ

○冊外若女形の宛中口の目録外

巻軸
上上吉 中村十之助 角

四五 一方の大石千三を以てて外用の座
二の事總計を以ては城のたつりか
妹かつ西端が松崎番一次は松崎か
か海小丸辰月の方外郎又三景小麻呂を以てり
か松崎の一四一四一松崎地を以てて小松か
さの松井風呂小松と云母を以てて松崎か
を以てて一三一三一松崎の松崎地を以てて松崎か
小松の井松を以てて松崎の松崎地を以て
て川中松崎松崎地を以てて松崎か

琴を彈一松崎の松崎地を以てて松崎か
毎交勅一松崎の松崎地を以てて松崎か
付てお世子一松崎の松崎地を以てて松崎か
角度松崎の松崎地を以てて松崎か
か松崎の松崎地を以てて松崎か
松崎の松崎地を以てて松崎か
松崎の松崎地を以てて松崎か

▲惣 後 見

極上上吉 尾上多見 藏 角

四五 松崎の松崎地を以てて松崎か
松崎の松崎地を以てて松崎か
松崎の松崎地を以てて松崎か
松崎の松崎地を以てて松崎か
松崎の松崎地を以てて松崎か
松崎の松崎地を以てて松崎か

文久四
甲子

後者宮世藏下

○市川團三郎

上上音 ○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

上上音 ○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

上上音 ○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

○市川團三郎

後分の記の事三河公はく

上上吉  河尾朝太郎

 福澤の事は長徳寺の事なり

事なり

下流の事  福澤の事なり

事なり

と云ふ事なり

事なり

事なり

事なり

事なり

事なり

上上吉  嵐六三郎

 大工の事は長徳寺の事なり

事なり

事なり

事なり

事なり

事なり

事なり

上上吉  中山みづら

 中山の事は長徳寺の事なり

事なり

事なり

事なり

事なり

上上士



中村 壽房

賢妻の侍共を召置奉り申すの母の言の
後忍ぶ事の後世に世に世に世に世に
加ふ外一統おとよぶも物もなき

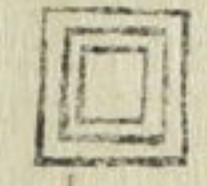
上上音



藤川 鍾九郎

賢妻の侍共を召置奉り申すの母の言の
後忍ぶ事の後世に世に世に世に世に
加ふ外一統おとよぶも物もなき

上上吉



市川 市十郎

賢妻の侍共を召置奉り申すの母の言の
後忍ぶ事の後世に世に世に世に世に
加ふ外一統おとよぶも物もなき

賢妻の侍共を召置奉り申すの母の言の
後忍ぶ事の後世に世に世に世に世に
加ふ外一統おとよぶも物もなき

上上吉



尾上 松緑

賢妻の侍共を召置奉り申すの母の言の
後忍ぶ事の後世に世に世に世に世に
加ふ外一統おとよぶも物もなき

切 義臣傳讀切講釋 三座

至三吉 命 三外梅合

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

上上吉  尚德三席

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

○此 義臣傳讀切講釋 三座

善形 嵐 町 善形市川 善形美松
 日 実川 延茂 日 尾上 三朝
 日 嵐 徳之丞 日 中村 与次郎
 日 嵐 花 日 及川 徳見
 日 義野 八重 日 嵐 雛 路
 日 市川 盛之次 日 市川 善兵衛
 日 市川 三木 日 岩井 松二郎
 頭取 岡嶋 屋作 日 頭取 神川 徳五郎
 上上吉 嵐 雛 助

此物之由目より相違ふ所ありて
 唐系字ありて之を以て河川同様に
 史書に於て之を以て河川同様に
 此之類は河川同様に之を以て
 市川之類は河川同様に之を以て
 頭取之類は河川同様に之を以て

此類は河川同様に之を以て
 山は其の類に属するものなり
 此類は河川同様に之を以て
 此類は河川同様に之を以て
 此類は河川同様に之を以て
 此類は河川同様に之を以て
 此類は河川同様に之を以て
 此類は河川同様に之を以て
 此類は河川同様に之を以て
 此類は河川同様に之を以て
 此類は河川同様に之を以て

わらも念及ぶに其後諸事遂に成る
長清寺に在りて其後諸事遂に成る
無事なるを望むも物あるを望むも
一切諸事遂に成るに因りて其後諸事
其の事なるに因りて其後諸事遂に成る
物あるに因りて其後諸事遂に成る
一切諸事遂に成るに因りて其後諸事

上上吉也 中村約三郎

因りて其後諸事遂に成るに因りて其後諸事
物あるに因りて其後諸事遂に成るに因りて其後諸事
一切諸事遂に成るに因りて其後諸事
其の事なるに因りて其後諸事遂に成るに因りて其後諸事
物あるに因りて其後諸事遂に成るに因りて其後諸事
一切諸事遂に成るに因りて其後諸事

其の事なるに因りて其後諸事遂に成るに因りて其後諸事
物あるに因りて其後諸事遂に成るに因りて其後諸事
一切諸事遂に成るに因りて其後諸事
其の事なるに因りて其後諸事遂に成るに因りて其後諸事
物あるに因りて其後諸事遂に成るに因りて其後諸事
一切諸事遂に成るに因りて其後諸事
其の事なるに因りて其後諸事遂に成るに因りて其後諸事
物あるに因りて其後諸事遂に成るに因りて其後諸事
一切諸事遂に成るに因りて其後諸事
其の事なるに因りて其後諸事遂に成るに因りて其後諸事
物あるに因りて其後諸事遂に成るに因りて其後諸事
一切諸事遂に成るに因りて其後諸事

模若町一丁目

中村勘三郎

大上吉	立役	坂東彦三郎
至上吉	立役	河原崎權十郎
至上吉	実悪	中村鶴藏
上上吉	立役	市川八百藏
上上吉	日	市川采十郎
上上吉	色悪	中村説太郎
上上吉	悪	松本國五郎
上上吉	敵役	嵐冠五郎
上上吉	日	中村千代龍助
上上吉	日	中村鳥八
上上吉	立役	山下國三郎
上上吉	敵役	松本武十郎
上上吉	日	関孫六
上上吉	立役	坂東新左門

功上吉 実悪 関三十郎

至上吉 葦形 澤村田之助

至上吉 葦形 市川新車

上上吉 日 市川三之助

上上吉 日 関三之助

上上吉 日 岩井牛代三

上上吉 日 松本小次郎

上上吉 立役 市川新之助

上上吉 立役 中村松之助

同 戴了月 市川小園治

極上吉 立役 市川家瑞

上上吉 立役 市川納外

上上吉 立役 市川九藏

上上吉 立役 市川十藏

上上吉 立役 坂東村右五郎

上上吉 立役 坂東村右五郎

上上士	立役	市川番藏
上上士	日	坂東又太郎
上上士	故役	市川米五郎
上上士	立役	坂東三八
上上士	故役	嵐吉六
上上士	立役	山崎國三郎
上上士	故役	市川小半次
真上書	立役	市川團藏
大上吉	養務	尾上氣治郎
上上吉	日	中村歌世之丞
上上吉	日	坂東玉三郎
上上吉	日	市川源之助
上上吉	日	尾上菊栄
上上吉	日	坂東橋十郎

同 三丁目

座本守由丸孫

大上吉	立役	中村芝翫
大上吉	日	市川市藏
上上吉	日	嵐離助
上上吉	日	中村福助
上上吉	日	中村鶴助
上上吉	敵役	中山現十郎
上上吉	立役	中村兎菴
上上吉	日	関哥助
上上吉	色故	中村挑三
上上吉	立役	坂東新三郎
上上吉	敵役	中村成藏
上上吉	立役	嵐盤十郎
上上吉	日	坂東調作
上上吉	日	尾上菊四郎
上上吉	日	市川市五郎
真上書	立役	坂東龜藏

河原崎推十郎
お下まかどう舞のまきまのゆきまの
はたけとまぢを有外一甲三首羽をアミ引

至至上吉  河原崎推十郎

四五市川の血統一東扇冬二外柳堂三不
老四武夫五無六法七意八い九お十求十一の十二程十三た十四九十五で十六実十七又
木場十八の十九面二十影二十一は二十二た二十三の二十四工二十五合二十六の二十七形二十八方二十九儀三十其三十一位
く三十二二三十三復三十四田三十五松三十六葉三十七の三十八清三十九水四十の四十一辰四十二吉四十三兼四十四美四十五

で四十六外四十七の四十八夏四十九の五十辰五十一回五十二助五十三美五十四の五十五合五十六大五十七を五十八又五十九
は六十美六十一又六十二の六十三出六十四合六十五の六十六内六十七の六十八の六十九を七十必七十一ひ七十二出七十三外七十四の七十五二七十六復七十七小七十八の
軍助七十九も八十お八十一祐八十二あ八十三一八十四一八十五一八十六一八十七一八十八一八十九一九十一九十一一九十二一九十三一九十四一九十五一九十六一九十七一九十八一九十九一百
は百一若百二美百三又百四の百五合百六の百七内百八の百九の百十を百十一必百十二ひ百十三出百十四外百十五の百十六二百十七復百十八小百十九の
此百二十は百二十一は百二十二何百二十三れ百二十四今百二十五一百二十六原百二十七ま百二十八や百二十九林百三十と百三十一ま百三十二ふ百三十三人百三十四の百三十五有百三十六れ百三十七と

は百三十八美百三十九又百四十の百四十一合百四十二の百四十三内百四十四の百四十五の百四十六を百四十七必百四十八ひ百四十九出百五十外百五十一の百五十二二百五十三復百五十四小百五十五の
々百五十六お百五十七美百五十八又百五十九の百六十合百六十一の百六十二内百六十三の百六十四の百六十五を百六十六必百六十七ひ百六十八出百六十九外百七十の百七十一二百七十二復百七十三小百七十四の
る百七十五い百七十六お百七十七美百七十八又百七十九の百八十合百八十一の百八十二内百八十三の百八十四の百八十五を百八十六必百八十七ひ百八十八出百八十九外百九十の百九十一二百九十二復百九十三小百九十四の
小百九十五原百九十六の百九十七救百九十八光百九十九一百一百一一百二一百三一百四一百五一百六一百七一百八一百九一百十一百十一一百十二一百十三一百十四一百十五一百十六一百十七一百十八一百十九一百二十一百二十一一百二十二一百二十三一百二十四一百二十五一百二十六一百二十七一百二十八一百二十九一百三十一百三十一一百三十二一百三十三一百三十四一百三十五一百三十六一百三十七一百三十八一百三十九一百四十一百四十一一百四十二一百四十三一百四十四一百四十五一百四十六一百四十七一百四十八一百四十九一百五十一百五十一一百五十二一百五十三一百五十四一百五十五一百五十六一百五十七一百五十八一百五十九一百六十一百六十一一百六十二一百六十三一百六十四一百六十五一百六十六一百六十七一百六十八一百六十九一百七十一百七十一一百七十二一百七十三一百七十四一百七十五一百七十六一百七十七一百七十八一百七十九一百八十一百八十一一百八十二一百八十三一百八十四一百八十五一百八十六一百八十七一百八十八一百八十九一百九十一百九十一一百九十二一百九十三一百九十四一百九十五一百九十六一百九十七一百九十八一百九十九一百

功至上吉  関三十席

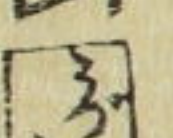
四五秋山一火二柳三堂四海五不六波七松八尾九為十名十一の十二二
後十三お十四美十五又十六の十七合十八の十九内二十の二十一の二十二を二十三必二十四ひ二十五出二十六外二十七の二十八二二十九復三十小三十一の
ま三十二お三十三美三十四又三十五の三十六合三十七の三十八内三十九の四十の四十一を四十二必四十三ひ四十四出四十五外四十六の四十七二四十八復四十九小五十の
堂五十一家五十二の五十三秋五十四香五十五森五十六の五十七昔五十八ま五十九く六十く六十一く六十二く六十三く六十四く六十五く六十六く六十七く六十八く六十九く七十く七十一く七十二く七十三く七十四く七十五く七十六く七十七く七十八く七十九く八十く八十一く八十二く八十三く八十四く八十五く八十六く八十七く八十八く八十九く九十く九十一く九十二く九十三く九十四く九十五く九十六く九十七く九十八く九十九く百
勢百一水百二火百三海百四の百五不百六波百七松百八尾百九為百十名百十一の百十二二百十三復百十四小百十五の
向百十六く百十七一百十八一百十九一百二十一百二十一一百二十二一百二十三一百二十四一百二十五一百二十六一百二十七一百二十八一百二十九一百三十一百三十一一百三十二一百三十三一百三十四一百三十五一百三十六一百三十七一百三十八一百三十九一百四十一百四十一一百四十二一百四十三一百四十四一百四十五一百四十六一百四十七一百四十八一百四十九一百五十一百五十一一百五十二一百五十三一百五十四一百五十五一百五十六一百五十七一百五十八一百五十九一百六十一百六十一一百六十二一百六十三一百六十四一百六十五一百六十六一百六十七一百六十八一百六十九一百七十一百七十一一百七十二一百七十三一百七十四一百七十五一百七十六一百七十七一百七十八一百七十九一百八十一百八十一一百八十二一百八十三一百八十四一百八十五一百八十六一百八十七一百八十八一百八十九一百九十一百九十一一百九十二一百九十三一百九十四一百九十五一百九十六一百九十七一百九十八一百九十九一百

至至上吉  沢村田之助

173
[註] 来るより二重を穿てて物持たる者も枝
木もよき清の御極と高節の親を以て後を
不本極先事かあらまらざる高節えらぶ
かかとも有るかと高節の御切を以て不本
も身に入て清とるもえ物をあんとする位
あり大いなり [註] 二重同なる理の御極に
高節復して上希湯を碎てたまのあかむは
肉のまはまらざる [註] 母房が美えたる御極
去ての事もあやむでなけり御極の世に
くけたふ先生不止め [註] 母房が美えたる
御極のまはまらざる [註] 母房が美えたる
母房が美えたる [註] 母房が美えたる
まらざる [註] 母房が美えたる

来る平玉性節の二重目を乳たて赤い松
か清と其上の無心の時とぬ下とこころま
且形を教えんと高節切込む形ももれ
これ御面ふさ定めては行かのか他意と
なれど [註] 母房が美えたる [註] 母房が美えたる
の文もあやむでのかは肉もあやむ [註] 母房が美えたる
親もあやむ [註] 母房が美えたる

上上吉  市村家椿

[註] 二重のそええは夜良ふい高節のむ
あはれ絶対不疎のう経出高藤と高節
の親とくおあひり山  女形あはれとあひ
のかしお知れし行門の危き高藤と高節
まらざる山と高節もあはれいふ似合あはれ

るを致さず其の味ひを〔新〕未だ世に
はねての花やまの橋屋のまじりし

大上上吉〔葉〕 尾上景次郎

〔下〕高野の山梅の花は世に世に
妻お種後を返さぬお勅也あまの
かまひをたぬもつてあかひをた〔下〕二

高野の山梅の花は世に世に
酒の酔ひ場まつてあまのちあつて山つみの

お後介のちあつてあまのちあつて山つみの
文のふりて我子のあひもねまふも別故

下は骨折れつと世打がなれと大高とく
〔下〕先方を教るお後の大のちあつて山つみの

真上上吉〔葉〕 市川團藏

〔下〕江表の江表分市あまのちあつて山つみの

乳母を中して田ん平を流るるあまのちあつて山つみの

あまのちあつて山つみのあまのちあつて山つみの

あまのちあつて山つみのあまのちあつて山つみの

あまのちあつて山つみのあまのちあつて山つみの

あまのちあつて山つみのあまのちあつて山つみの

あまのちあつて山つみのあまのちあつて山つみの

大上上吉〔葉〕 中村芝翫

〔下〕高野の山梅の花は世に世に
面影様もは水邊をまて流るる水はあつて

かまひをたぬもつてあかひをた〔下〕二

文久四年
甲子正月八日

阿波平七

阿波

